免疫抑制・化学療法によるＢ型肝炎ウイルス再活性化とその対策

早田　哲郎[1)]　西澤　新也[1)]　森原　大輔[1)]
横山　圭二[1)]　櫻井　邦俊[1)]　上田　秀一[1)]
坂本　雅晴[1)]　阿南　　章[1)]　竹山　康章[1)]
入江　　真[1)]　岩田　　郁[1)]　釈迦堂　敏[1)]
佐々木秀法[2)]　高松　　泰[2)]　向坂彰太郎[1)]

[1)] 福岡大学医学部消化器内科
[2)] 福岡大学医学部腫瘍・血液・感染症内科

要旨：免疫抑制・化学療法後のＢ型肝炎ウイルス再活性化は，致死的重症肝炎を引き起こすことがあり，免疫抑制・化学療法の施行医は，この肝炎発症が治療終了から数ケ月経って発症する事など，本疾患の特徴をよく認識しておく必要がある．また，この肝炎の発症は HBs 抗原陰性症例においてもみられるため，免疫抑制・化学療法を予定している患者に対しては，HBs 抗原に加え HBc 抗体の測定をルーチン化し，これが陽性であれば，原疾患の治療を行う前に，核酸アナログ投与の実施を含めて肝臓専門医にコンサルトをしていただきたい．

キーワード：免疫抑制・化学療法，**B**型肝炎ウイルス再活性化，核酸アナログ